

平成22年度
入学試験問題

国 語

2月2日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 先生にシヨウタイ状を送る。
- (2) 新商品のセンデンに力を注ぐ。
- (3) 自主映画をセイサクする。
- (4) 養分をチヨゾウする。
- (5) 太平洋をコウカイする。
- (6) キンベンな人を手本にする。
- (7) アンソクの地を求めて旅に出る。
- (8) 朝に仏像をオガむのが日課だ。
- (9) 負けることをホツする人はいない。
- (10) 物音におどろいて馬がアバれる。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

植物たちは、自然(A)の中で、まわりの生物たちと闘たたかい、身を守って生きている。では、実際(B)に、自分の暮らしている環境かんきやうをどのくらい感じているのだろうか。私たち人間がそれを直接知るのはむづかしい。しかし、植物たちが環境を感じる感覚をどれくらい持っているかは、想像できる。

5

私たち人間には感覚があり、代表的な五つの感覚が「五感」と言われる。目で見る視覚、耳で聞く聴覚ちやうかく、鼻でかく嗅覚きゆうかく、舌で味わう味覚、皮膚ひふで感じる触覚しよくかくである。植物たちに、これらの感覚があるのだろうか。

植物に、視覚はあるだろうか。植物たちがまわりの様子や自分がいる「場所」をよく知っていることは、すでに紹介しょうかいした。発芽に際して、種子は「光が当たるか、当たらないか」を見きわめる。その際、「光が当たるか、当たらないか」だけでなく、光の色まで識別する。

「遠赤色光で、まわりの植物量を知り、背丈せたいを伸ばす」ことは、紹介したばかりである。このように、植物たちは、光の色や強さを知っ

15

ていなければ、自然の中で生きていけないのだ。だから、自分に当たる光をよく見ている。別の例を紹介しよう。

植物が生活する自然の中では、光の強さはさまざまである。植物は、光の強さに応じて、葉っぱの姿すがたを変える。光の弱い場所では、面積は広いが薄い葉っぱになる。それに対し、光の強い場所で育つ葉っぱは、面積は小さいが、厚くなる。強い光は、厚い葉っぱの中で届くから、厚い方が光を有効に利用できる。

① この特徴は、同じ種類の植物が日なたと日陰ひかげで育った場合にも見られる。また、同一の植物体の、光のよく当たる葉と日陰にある葉でも、この傾向は認められる。つまり、植物たちは自分のいる「場所」の様子をよく知っており、その場に適した葉の形態をつくるのだ。

25

植物の聴覚に対しては、「植物に音楽を聴かせると、よく成長する」と言われる。数年前、あるテレビ番組で、その話題が取り上げられた。そのときには、「ハウス内に音楽を流せば、甘いトマトができる」と言われた。

30

また、「アサガオにモーツァルトを聴かせると、茎くきがよく伸びた」という新聞記事もあった。「イチゴを甘くするのには、ロックや演歌よりもクラシックの方が効果がある」とも言われる。これらを追試して、②「音楽は植物の成長をよくする」という人がいたり、「植物の成長に、音楽は効果がない」という人もいる。

35

私たちもいろいろ実験して、「どんな音楽を聴かせればよいのか」「何ヘルツの音波(ア)を植物に聴かせれば効果があるのか」などを調べている。しかし、何度やっても、効果があるときがあり、効果がないときがある。再現性が見られないのだ。これでは、科学的な実験③にならない。だから、「植物に聴覚はない」と結論した方がいいのかも知れない。

しかし、「植物にも、音楽を聴きたいときと聴きたくないときがある」と考えることはできないだろうか。「聴きたくもないときに聴かされたら、効き目(イ)がない。聴きたいと思つているときに聴かせれば、効き目がある」と考えれば、楽しい。もし、植物たちが音楽を聴きたいときと、聴きたくないときがわかれば、植物たちが聴覚を持つことを証明できるかも知れない。しかし、聴きたいときと聴きたくないときを知るのは、むづかしいだろう。

味覚は、植物たちが「辛い」とか「甘い」とか教えてくれないのでわからない。でも、私たちは、植物たちが、食塩水をなめて、「辛い！」とびっくりしているとか思えない現象を知っている。

私たちは、研究のためにウキクサを使っている。春、池や田んぼに浮かび漂たなよう、小さな緑の植物である。「花が咲かない浮き草の……」と歌われるが、ウキクサもりっぱに花を咲かせる。この植物は小さいので、実験に使いやすい。

ウキクサの一種に、アオウキクサがある。このアオウキクサにストレスをまた与えようと、ある物質が放出される。a、アオウキク

サを海の水と同じ塩辛さの約三パーセントの食塩水に一〇分間つける。その後、二時間、普通の水溶液すいようえきに浮かべる。すると、水溶液中に、アオウキクサからある物質が放出される。

この物質は、ある化粧品会社けしょうひんが「カーネーションに吹きかけると、開花する日が早くなり、花の個数も一・五〜二倍に増える」と発表し、話題となった。アオウキクサが放出するのは、吹きかけるだけで花を咲かせる不思議な物質なのだ。やがて、花④咲かスプレー”として市販される日がくるかも知れない。

「何分間、食塩水につければ、この不思議な物質を放出するのか」を調べて、驚おどろいた。たったの一秒間つけるだけで放出されるのだ。これは、食塩水につけられた植物が、つかった瞬間しゆんかんに、「辛い！」と感じたと思えない。

その後、辛しげきかった刺激で、不思議な物質を放出しはじめるのだろう。この現象だけで、「植物に味覚がある」と結論するのはおかしいかも知れない。しかし、これは、植物たちが、いかにも、「辛い！」と感じているような反応はんのうである。

触覚も、植物たちにある。すでに紹介したように、植物は、土の中ちのちゅうにいるという「場所」を知っていた。伸びてくる茎は、土と触

れる」という接触の刺激を感じているのだ。この刺激が、茎を肥大(ウ)させ、太く短くする。

オジギソウは、さわられると、b 葉をたれる。植物に触覚

があることを、楽しく見せてくれる。アサガオは、つるの先端せんたんで巻

きつくものを探している。だから、何かにさわると、すぐに巻きつ

く。ブドウやキュウリの巻きひげも、何かに触れるとからまりつく。

これらは、植物に触覚があることをはっきりと教えてくれる。

このように考えてくると、植物は五感のうち、視覚、聴覚、味覚、

触覚を「持っている」と断言できなくても、「持っていそうである」

とは言える。

(田中修『ふしぎの植物学―身近な緑の知恵と仕事―』)

85

問一 〜〜〜線 (ア)「音波」、(イ)「効き目」、(ウ)「肥大」の読みをひらがなで答えなさい。

問二 〓〓〓線 (A)「然」、(B)「際」の部首名をそれぞれひらがなで答えなさい。

問三 〓〓〓線 ①とありますが、「この特徴」とはどのような特徴ですか。本文中の語を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問四 〓〓〓線 ②とありますが、このように意見が分かれるのはなぜですか。理由を説明した次の文の空らんにあてはまる表現を本文中より十字以内でぬき出しなさい。

実験をくり返しても、その結果には から。

問五 〓〓〓線 ③とありますが、ではどのようにすれば聴覚の存在を科学的に確認できると筆者は考えていますか。その考えが表れている一文を本文中より探し、最初の五字を答えなさい。

問六 a、 b に入る適当な語を次から選び、記号で答え

なさい。

ア、およそ イ、ずっと ウ、たちまち エ、たとえば

問七 線④とありますが、何が「花咲かスプレー」になる可

能性があるのですか。次から最も適当なものを選び、記号で

答えなさい。

ア、カーネーションから放出される物質で、アオウキクサに吹きかけることで花を咲かせる物質を取り出すことができるもの。

イ、アオウキクサの水溶液から取り出せる物質で、もともと花の咲かない季節でも花を咲かせることができるようになるもの。

ウ、食塩水から取り出すことができる物質で、カーネーションの花の個数を一・五〜二倍に増やすことができるもの。

エ、アオウキクサがストレスを受けたときに出す物質で、吹きかけるだけで花を早くたくさん咲かせることができるもの。

問八 線⑤とありますが、筆者は具体的にアオウキクサのど

のような反応について言っているのですか。三十文字以内でまとめなさい。

問九 本文の内容について、正しいものには○を、まちがっている

ものには×を解答らんにご答えなさい。

ア、植物の視覚は光の色や強さを感じする力であり、それによって植物は生育環境を見極め、形態を適応させていく。

イ、植物に聴覚があると断言することはできないが、音楽は確実に植物の成長の手助けをすると言える。

ウ、植物の味覚は塩辛さの判別のみを発揮されるが、それはアオウキクサを使った実験ですでに証明されている。

エ、植物に触覚があるということは、土の刺激を感じる茎やオジギソウの葉、アサガオのつるの様子から明らかである。

オ、植物がどのくらいの感覚をもって身を守り、生きているのかは、まだ全部明らかになったわけではない。

問十 この文章に題名をつけるとしたら、どれが適当ですか。次か

ら選び、記号で答えなさい。

- ア、植物たちに感覚はあるか
- イ、植物の実験は成功するか
- ウ、植物たちは生き残れるか
- エ、植物の五感はよみがえるか

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

小学校卒業の記念に、私たち三人は、JR千葉駅までくり出し、大型デパート巡りをしながら面白い物を買ったり、おしゃべりをして楽しんでいた。

試食の旅の終わりはデパート巡りの終点でもあった。地下から一階へ戻り、ハンカチ売場の時計に目をやると、すでに三時四十分。そろそろタイムリミットだ。

「あー、楽しかった。帰りたくない」

「ほんと。みんなでまた来たいね」

「来れるかな……」

プロマイドと鉛筆の入った鞆を大事に抱え、もと来た駅へと引き返していく道すがら、私たちの口数が徐々に減ったのは不機嫌になつたせいじゃなく、花火大会の終わりみたいな、雪合戦の終わりみたいな、ぽつんと心だけ残されるような物寂しさのせいだったと思う。① 浜辺に散った や、② 泥にまみれた を見たくないから、私たちは殊更に先を急いだ。

10

行き交う人々の足も速度を増した暮れかかりの千葉駅。残りわずかなお小遣いで切符を買うと、私たちは無言のまま帰りのホームへ

足を進めた。なんだか気が抜けて、人混みにも疲れて、早く家に帰りたいけど帰りたくないような、微妙な気分。階段を上りきるとすでに一番線には中野行き④の黄色い電車が待ちうけていて、もしもクロー子④があんなことをしなければ私はそのまま、微妙な気分のまま帰路bについていたことだろう。

「乗ろっか」

と春子が電車の戸口へ足をむけ、

「うん」

と私がそれに続き、

「うん」

とクロー子もうなずいた。

その直後だった。

車内に踏みこんだ私と春子がふりむくと、「うん」とうなずいた

はずのクロー子がまだホームの上にいる。

「クロー子？」

「どした？」

同時に尋ねると、クロー子は下唇cをへの字に持ちあげて、妙に力cませた腕をぐいと突きだし、線路を越えた四番線に停車中の青い電車を指さした。

「あ……あ……」

「あ？」

「あっちの電車に乗らない？」

「へ？」

突拍子dもない提案であった。

「なんで。だってあれじゃ家に帰れないよ」

「だから、帰らないでもうちよっただけ行かない？」

「どこに」

⑤「わかんない。でも一つだけ。一つめの駅に停まったら、すぐに戻ってくるから」

ジリジリ——。一番線の発車を告げるベルが鳴っても、クロー子は頑dとしてホームに両脚を踏んばったまま。体育の時間、男子はサッカーで女子だけ鉄棒なんてずるいと泣いて抗議したときと同じ、じわじわした目で訴えるように私たちをにらんでいる。

と、ふいに春子が「乗ろっ」と手首を引っ張った。

「あの青いのに乗ろっ」

つかまれたのは私の手首だった。

「急いで！」

「走れ、走れ」

「あー、ベル鳴ってるーっ」

ゼイゼイあえぎながら階段を駆けおり、地下の構内を突っ切って、55
青い電車の待つ四番線へと再びゼイゼイ駆けのぼった。ホームに出
るとすでに電車のドアは閉まりかけていて、先頭を切っていたク
子が「早く！」と私たちをふりむいた。渾身のラストスパート。私
たちはふらつきながらも狭まっていく戸口をめざし、一步遅れてい
た春子を左右から引っ張るように車中へ押しこんだ。60

滑りこみセーフ。私たちの背中すれすれでドアが閉ざされ、電車
が武者震いのような振動を伴って動きだす。どこへ行くとも知れ
ない青い電車が。

戸口の前にへたりこんでいた私たちは、やがて誰かともなくのっ
そり顔をあげ、窓ガラスのむこうを勢いよく横切っていく景色を見
送った。65

灰色のビルも、密集する民家も、その合間にうずくまる緑も、何
もかもが一瞬のうちに視界を駆けぬけていく。さっきまで私たち
がいた駅ビルも、千葉そごうも、カツオも、今では遠い空の下。走
る電車はあらゆるものを小気味良いほど簡単に過去へと押し流して
くれる。70

「ほんとに乗っちゃった……」

みんなの荒い息にクの子のとぼけたつぶやきが混じると、私たち

ははたと我に返って目を合わせ、それから一斉に

「なんでーっ、なんであたしたち、青いのに乗ってんの？ なんで
黄色じゃないの？」

「すごい。うちらって、すごい！」

「よくやるよ。もう、根性入ってるよね」

ひゃあひゃあと身をよじりながら互いの快拳を讃えあう。何がお
かしいのか、何がすごくて何が根性なのか考えもしないまま、それ
でも何かがたまらなくおかしく、たまらなく楽しかったこの一時――。

私たちの腹部を疼かせていた笑いの波が徐々に引いたのは、電車
が動きだして五分ほど経ったあたりだろうか。66

五分。ひと駅ぶんの所要時間にしては長いほうだ。しかも電車は
一向に減速する気配がなく、かなりのスピードで走り続けている。85

いやな予感が頭をかすめた。

「まさか、これ……快速だったらどうする？」

「まさか」

「だって停まんないよ。それにやたら速いし」

電車が快調に飛ばせば飛ばすほど私たちは不安になり、十分も過
ぎた頃には半ばパニックに陥っていた。90

「止めてー。誰か止めてーっ！」

「やだ、またホーム通りすぎていくよ」

「このまま何時間も停まらなかつたらどうする？ そんでもって、

ぜんぜん知らない町にたどりついたら……」

「警察に助けてもらう」

「だって切符ないんだよ、あたしたち。無賃乗車だよ。前科一犯だよ」

「やだーっ」

言いだしっぺのクロー子が真っ先に涙目になったとき、足下のフランスが急に崩れて、電車がかくんと減速した。ハッと目をやると、窓のむこうを流れる景色も速度をゆるめている。

「次は、八幡宿、八幡宿……」

助かった！

と思うのは早かった。

八幡宿。

「それ、どこ？」

「まさか……もう東京だったりして」

「まさか」

「い……茨城だったりして」

「まさかまさか」

私たちが「まさか」を連呼しているうちに窓外の景色が停止し、静かに開かれた鼻先のドアから冷たい疾風が吹きこんできた。

「あ。海」

「千葉だ……」

95

一瞬、確かにかすめた潮の香り。懐かしい内房の海の気配に、が

ちがちだった肩の力がやわらいだ。海は千葉、という発想は、今思

うと海にも千葉にも失礼な気がするが、日本全国津々浦々、どれだ

け多くの土地が海に面していようと、当時の私たちにとって潮風

とはやはり臨海学校や家族旅行で訪れた房総の沖から吹く風だった。

八幡宿の駅は古く閑散としていて、ホームの人氣もまばらだった。

とりあえずまだ千葉にいることを確信した私たちは、慌てず騒がず

ホームへと降り立ち、周囲の様子をうかがった。この日最後にして

最大のピンチに見舞われたのは、このときだ。

帰りの電車はいつ来るのか、どこへ来るのかわからずもじもじし

ていた私たちを、改札にいた駅員が不審げに呼びとめたのだ。

「君たち、どうしたの」

私たちはびっくりと身構えた。

「呼んでるよ。行く？」

私がささやくと、クロー子は「だめ」と厳めしく阻んで、

「行ったら、無賃乗車がバレバレじゃん。そしたらここまでの切符

代、払わされるんだよ」

「そんなお金もうないよ」

「そしたら警察呼ばれるわけさ」

「ひえー、やっぱ前科一犯？」

110

130

105

125

100

120

「それより、親呼ばれたらどうしよう」

動揺する私たちの様子に、駅員のおじさんはますます首を傾け、

「ちよっと君たち、今、あの電車に乗ってきたでしょ」

ついには改札口を離れて私たちのほうへと歩みよってきた。

「ほら、そのの三人……」

みるみる迫りくる足音に、すくみあがる私たち。

「ひゃーっ！」

十分後、私たちはおとなしく肩を並べて、八幡宿駅上りホームの色褪せたベンチの上にいた。私はぼんやりとブルーグレイの空を見

あげ、春子はじっと足下を見おろし、クー子は機械的にぼりぼりお

菓子を嚙りながら。

クー子の膝に載ったスヌーピーのスポーツバッグには、彼女が持参したお菓子がまだまだぎっしり詰まっている。駅員のおじさんはこの大きなバッグを怪しみ、私たちを家出少女と誤解して声をかけてきたのだった。「電車を乗りまちがえてしま……」と春子が

機転をきかせて説明し、「お一つどうぞ」とクー子がサイコロキヤ

ラメルを進呈すると、おじさんは簡単に私たちを釈放し、親切に

帰りのホームまで案内してくれた。ついてないねえ、よりによって

特別快速に乗りちがえるなんて、などとぶつぶつ言いながら。

135

「人騒がせな」

「ほんと、食べてばっかいるから」

〈中略〉

「あたしさ」

顔の半分を西日で光らせて、クー子がいつになく硬い声を出す。

「あたし、うちの親には今日、千葉に行くって言ってないんだ。奴

らは今頃、あたしが友達と花見川のサイクリングコースをちやりちやり走ってると思ってるわけさ」

「えっ」

「うちの父ベエと母ベエ、見かけによらず厳しいんだよ。行っちゃいけないことかいっぱいあるし、小学生同士でデパートなんてとんでもないって、あたし、これまで友達と買い物なんてしたことなかったんだ。ほんととはあとちよつとで解禁なんだけど、中学生になったら誰とどこ行っても良くなるんだけど、でもなんか今のうちにそういうこと、しておきたかったんだよね。それで今日はさ、一番の仲良しと、千葉どころかこんなよくわかんないところまで来て、なんていうかすごく……すごく……」

Ⅱ、とクー子はチョコのついた口角をにと持ちあげた。

155

160

165

170

「あたしも」と、左横からは春子の神妙な声もする。「あたしも今日、こんなところまで来て、なんか度胸がついたってどうか、ふっきれたってどうか……。これで私立の中学にも行けそうな気がする」

ちよっと待って。

妙に納得なっとくしている二人のあいだで、私の心がうなり声を上げた。

クー子も春子も早すぎる。私が痛すぎて触れられないところ、目を閉じてふわふわやりすごそうとしていたところを、二人はまともに直視なげし、嘆なげいて憂うれえて立ち往生して、そして今、こうして無事に通過しようとしている。

(森絵都『永遠の出口』)

問一 〓 線 a 「口数」、b 「帰路」、c 「カ(ませ)」、d 「告

(げる)」の読みをひらがなで答えなさい。

問二 〓 線 ①、②は楽しいお祭りごとが終わった状じょうきょう況きょうを示し

ています。文章の流れに注意して、空らんにあてはまる言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア、空き箱 イ、足跡 ウ、残雪 エ、靴底
オ、ガラス片 カ、燃えかす キ、残飯

問三 ——— 線③とありますが、この時の私の気持ちを説明したも

のとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、三人が気まずい雰囲気になってしまったので早く帰りたい

けれど、家に帰ってもつまらないので帰りにくい気持ち。

イ、早く家でほっとしたいので帰りたいけれど、楽しい今日一

日が終わってしまうことが惜しいので帰りにくい気持ち。

ウ、雰囲気が盛り上がらないのでもう帰りたいけれど、まだ残

された時間に何かが起こりそうな気もして帰りにくい気

持ち。

エ、お小遣いも残り少ないので帰りたいけれど、まだほしいも

のがたくさんあるので帰りにくい気持ち。

問四 ——— 線④とはどのようなことですか。二十五字以内で説明

しなさい。

問五 ——— 線⑤はどのような気持ちから発せられた言葉ですか。

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、となりの駅がどのような駅か確かめてみたい気持ち。

イ、時間がなくても、一駅ぐらいなら行けるだろうという気持ち。

ウ、自分のわがままをおし通すことで、自分が注目されたい気

持ち。

エ、とにかく、二人にいつしよに来てもらいたいという気持ち。

問六 ~~~~~ 線A、Bの意味を次からそれぞれ選び、記号で答えな

さい。

A、「小気味良い」

ア、あざやかで気持ちいい

イ、とてもすばや

ウ、あっさりして手ごたえがない

エ、落ち着いてゆるやかだ

B、「津々浦々」

ア、けしきの素晴らしいところ

イ、思い出の土地

ウ、ところどころ

エ、いたるところ

問七 I に入る言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、爆笑ばくしょうした イ、驚おどろいた ウ、握手あくしゅした

エ、苦笑した オ、はにかんだ

問八 ———— 線⑥とありますが、その理由を四十字以内で説明しなさい。

問九 ———— 線⑦とありますが、駅員が「私たち」を呼びとめたのはなぜですか。二十字以内で説明しなさい。

問十 II には比喩表現が入ります。あてはまる表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア、お腹すいたよ イ、満腹だよ

ウ、食べ過ぎだよ エ、お腹痛いよ